

あったことか、なかったことか、七つの国を七回越えたそのむこう、オペレンツ海のむこうに、ひとりの王さまがいました。王さまには、お姫さまが三人ありました。三人とも、きらめく星のように美しい娘でした。ところが、王さまには、大きな悩みがありました。それは、こんなことでした。

毎晩、真夜中になると、お姫さまたちがお城からいなくなるのです。どこへ出かけているのか、だれにも分かりません。朝になると、お姫さまたちは帰ってくるのですが、お姫さまたちがはいていた新しい上等の靴が、帰って来たときには、びりびりにさけていました。

王さまは心を痛めました。

「困ったことだ。このまま放っておくわけにはいかない」

そこで、王さまは、国じゆうに、こんなおふれを出しました。

「お姫さまたちが夜中にどこへ行くのか、つきとめた者には、お姫さまのひとりをつまとしてよい。そして、王国の半分をあたえる。ただし、真実を明らかにできなかった者は、首を斬る」

たくさんの若者たちが、われこそはと、お城にやって来ました。そして、毎晩、ひとりずつお姫さまたちの寝室の前に立って見張りをしました。ところが、夜中の十二時になると、強い風がふいてきて、見張りの若者は床に倒れこみ、そのまま寝てしまいました。お姫さまたちは、若者をめちやくちやにけとばして、どこかへ出かけてしまいました。

こうして、九十九人の若者が首を斬られました。

つぎの日が百人目という日の夕方、ひとりの貧しい若者がお城にやって来ました。若者は、お日さまよりまぶしいほど美しい人でした。若者がお城の中庭に入って来たとき、末のお姫さまが、まどから若者を見ました。末のお姫さまは、

（あの美しい若者も明日は首を斬られるんだ）と思って、なみだをひとすじこぼしました。

王さまは、若者に、

「おまえで百人目だ。おまえも首を斬られに来たのか」といいました。若者は、

「王さま、生きるも死ぬも一回限り。運だめしをしたいのです」といいました。

夜になると、若者は、お姫さまたちの寢室の前で、見張り番に立ちました。夜中の十二時になると、強い風がふいてきて、若者は、床にわたたばのように転がりました。そして、ひどい眠気におそわれて、そのまま寝てしまいそうになりました。

そのとき、寢室のとびらがすつと開いて、三人のお姫さまが出て来ました。一番上のお姫さまは、若者をひどくけとぼして、

「九十九人の首が飛んで、おまえが百人目さ」といって、出て行きました。

まん中のお姫さまも、若者のわき腹をけとぼして、同じことをいって出て行きました。

末のお姫さまは、やさしく身をかがめて、若者に口づけしました。若者は、たちまち眠気が覚めました。末のお姫さまは、上のお姫さまたちの後に続いて出て行きました。

若者は、立ち上がって、お姫さまたちのあとをつけて行きました。

お姫さまたちは、中庭のまん中まで行くと、地面をたたいていいました。

「大地よ、開け！」

すると、大地はいっぺんに開き、お姫さまたちは地面の下に下りて行きました。若者も、気づかれないよう、急いで後に続けました。

しばらく行くと、銅の森がありました。森は、なにかもが銅でできていて、ほんものの銅のりんごがなっていました。若者は、りんごをひとつもぎました。すると、森がかすかに鳴りました。末のお姫さまが、お姉さんたちにいいました。

「お姉さまたち、何か聞こえるわ」

ふたりのお姉さんはいいました。

「うしろはまっくら、前は明るい」

お姫さまたちは、また進んでいきました。

やがて、銀の森にさしかかりました。森には、ほんものの銀の梨がなっていました。

若者は、梨をひとつもぎました。すると、森が大きく鳴り響きました。末のお姫さまはいいました。

「お姉さまたち、何か聞こえるわ」

ふたりのお姉さんはいいました。

「うしろはまっくら、前は明るい」

やがて、金の森にさしかかりました。森には、ほんものの金のプラムがなっていました。若者は、プラムをひとつもぎました。すると、森は地面がゆれるほど、大きく鳴り

響きました。

「お姉さまたち、何か聞こえるわ」

「うしろはまっくら、前は明るい」

金の森を出ると、森のはずれに大きな黒いお城がありました。

黒いお城には、黒い王さまが住んでいました。黒い王さまには、王子が三人あって、三人のお姫さまたちは、毎晩、この王子たちの舞踏会ぶとうかいに通っていたのでした。

お姫さまたちは、黒いお城の広間に入って行きました。若者は、そのあとから、こっそり広間にすべりこんで、暖炉だんろの中に隠かくれました。見ていると、お姫さまと王子たちは、輪になって踊り始めました。踊りはみんなが靴をはきつぶすまで続けました。

やがて、若者は、そっと暖炉から出ると、矢のようにすばやく黒いお城をぬけだしました。そして、三つの森をぬけ、お姫さまたちの寝室の前にもどって横になりました。

朝になって、お姫さまたちが帰って来ました。上のふたりのお姫さまは、若者をけとばしていいました。

「お立ち、ばかなやつ。おまえも首を斬られるがいいよ」

若者は、深い眠りから覚めたように立ち上がって、大きなびをしました。

若者は、王さまのところに行きました。そして、銅のりんごと銀の梨と、金のプラムを出して見せながら、いいました。

「お姫さまたちは、昨夜ゆうよ、銅の森、銀の森、金の森を通りぬけて黒いお城に行きました。

これがその証拠しょうこです。それから、お姫さまたちは、黒いお城の王子さまたちと、靴をはきつぶすまで踊っていたのです」

王さまは、お姫さまたちを呼よんで、若者のいったことは本当かと問いたました。

お姫さまたちは、あれこれといいぬけようとしたが、銅のりんごと銀の梨と金のプラムを見ると、認みとめるほかありませんでした。王さまは、

「若者よ。約束やくそくどおり、三人の娘のうちのひとりを妻に選ぶがよい」といいました。若者は、末のお姫さまを選びました。そして、国の半分をもらいました。

結婚の知らせが、七つの国に送られました。結婚式けっこんしきは六週間続き、七週間目の終わりになってもまだ続けました。

それから、若者とお姫さまがどうなったのか、そのお話は卵の殻からに入れてキュレキュレー川に流してしまいました。あしたは、あなたたちがお客になるでしょう。

村上郁再話

資料『ハンガリー民話集』徳永康元・石本礼子・岩崎悦子・糸栄美子編訳／岩波書店